

早稲田大学大学院文学研究科紀要掲載論文執筆要項（補足資料）

「和文・中文論文」「欧文論文」の場合の文字・語数カウント方法について

論文執筆にあたって、文字数の確認は Microsoft Word の「校閲」⇒『文字カウント』機能を使い、「和文・中文」「欧文」に従って下記の計算式に当てはめて各自でご確認ください。



「和文・中文」論文の字数カウント方法（全角基準）

$$\textcircled{2} + \frac{\textcircled{1} - \textcircled{2}}{2}$$

右の論文例の場合…

$$\textcircled{2} 12,959 + (\textcircled{1} 16,119 - \textcircled{2} 12,959) \div 2 = 14,539 \text{ 字}$$

「欧文」論文の文字カウント方法（半角基準）

<字数>でカウントする場合

①文字数(スペースを含めない) + ②全角文字 + 半角カタカナの数

<語数>でカウントする場合

③単語数 のカウント数そのまま

まずはプルースト自身が映画をどのように認識していたかを確認しておこう。周知の通り、プルーストは映画についておよそ芳しい意見は持っていなかった。そもそも長大な『失われた時を求めて』の全編を通じて、文学、美術、音楽、演劇などの諸芸術が盛んに論じられる中で、映画への言及がなされるのはわずか3回にすぎない。最初は第2編『花咲く乙女たちのかげに』の第1部「スワン夫人をめぐる」の末尾で、大通りを散歩するオラットに乗馬を楽しむ紳士

「まるでギャロップで駆けぬぐも最終の第7編『見出しでサニール』と語りとなり、店内の明かりが不意に消されてしまう情景か、映画が上映される劇場内のような謎めいた暗るのであった」²と語られ、また前者については「クロイブリッジによる「クロイ」もしばしば指摘され、本稿それなりに興味深い記述ではある。しかし、プルーストが映画について抱いていた認識が

文字カウント	
統計:	
ページ数	10
単語数	13,637
文字数(スペースを含めない)	16,119
文字数(スペースを含める)	16,730
段落数	52
行数	391
半角英数の単語数	678
全角文字 + 半角カタカナの数	12,959
☒ テキストボックス、脚注、文末脚注を含める(E)	
閉じる	

③
①
②